



片倉もところ記念沙漠文化財団 ニューズレター

2019.9 No.6



ジッダ（ジェッダ）の夜景（渡邊三津子撮影）

● もくじ

- P2-9 （特集）若手研究者による沙漠文化研究の新たな地平
- P2-7 敷物一枚を眺めて、思うこと—モンゴル国カザフ牧畜民の羊毛フェルト製作— 廣田 千恵子
- P8-9 地方のアーカイブでの苦悩から—断片的な史料とリファレンスのネットワーク 中尾 世治
- P10-11（読み物）トルコの木版プリント「バスク」の世界 成原 さと子
- P12-13（本の紹介）『大野盛雄 フィールドワークの軌跡Ⅰ』 原 隆一
- p14 （報告）国際シンポジウム開催報告
- 「アラビア半島の文化遺産保護の現状と展開 サウジアラビアを中心として」開催報告 藤本 悠子
- P14-18（報告）2018 年 サウジアラビア調査報告
- p14-16 調査スケジュールと調査に対する現地の反応 藤本 悠子
- p17-18 半世紀の時をうめる謎解き—女性衣装のなぞを追いかけて 郡司 みさお
- P19-20（お知らせ）当財団共催企画展開催のお知らせ
- サウジアラビアオアシスに生きる女性たちの 50 年—「みられる私」より「みる私」
- P20 （お知らせ・編集後記）

敷物一枚を眺めて、思うこと

—モンゴル国カザフ牧畜民の羊毛フェルト製作—

廣田 千恵子（千葉大学大学院生）

美しき手仕事に魅せられて

「牧畜民が暮らす家」といって、どんな家が想像されるだろうか。移動を常とする人々の住居の中が、一見生活とは何の関係もない飾りや装飾で満たされている……そんな状態をすぐに想像できる人は少ないかもしれない。

モンゴル国のカザフ牧畜民が暮らす天幕型住居の内部は、当時それをはじめてみる私にとっては衝撃的な世界だった。カザフの女性たちは刺繍や織りなどの手芸技法をもちいて天井、ベッド、壁、床などに置かれるあらゆる用具・家具を美しく装飾し、住居内を鮮やかに彩っている。さらには、布団の下のマットレスなど普段人目につかない部分にいたるまで丁寧に刺繍されているのだから、まったく、その装飾にかけられた時間と労力を思うだけでため息が出てしまう。私は彼らが作り出す美しい装飾品の数々に圧倒されながらも強烈に惹きつけられ、モンゴル国西部バヤン・ウルギー県に居住するカザフ人のもとに通うようになった。

彼らが装飾をほどこす家具の中でも、ここ数年とくに個人的に関心を寄せているものがある。それは、カザフのフェ

ルトの敷物「サルマック（сырмак）」だ（写真1）。羊毛を原料とする厚手のフェルトを2枚重ね合わせて作られるこの敷物は、防寒に優れており、長きにわたってカザフ牧畜民の生活を支えてきた。どの家庭もこれを複数枚所有していて、日常的に床に敷かれ使用されるだけでなく、客人をもてなす時にも、結婚時の婚資や慶事の際の贈答品としても使われる。

なぜこれに関心を持つようになったかといえば、それはウルギーのカザフ人との生活を通じて、この敷物がとくに大変な手間をかけて作られるものであることを知ったからだ。縫製作業はもちろんのこと、サルマックの材料であるフェルトを作る工程にも大変な労力がかけられている。この敷物を眺めていると、私にはこの敷物一枚ができるまでの様々な“裏ドラマ”が思い出される……今回はその一部を紹介したい。

仔ヒツジの毛刈り

サルマックを作るためには、まず羊毛でフェルトを作る。ただし、サルマックに用いられる羊毛は、コズ・ジュン



写真1 フェルトの敷物「サルマック」



写真2 仔ヒツジを川へ投げた様子

(қозы жүні)と呼ばれる仔ヒツジの短くて柔らかい毛と、クゼム・ジュン (күзем жүні) とよばれる夏に一度毛刈りをした後に生える毛である。これらは8月上旬に刈られる。

コズ・ジュンを得るためには、まず仔ヒツジを川で洗う事から始まる(写真2、3)。この仔ヒツジを川で洗って汚れを落とす行為のことを、カザフ語でトガトウ (тоғайты) という。洗い方は様々だが、私がバヤン・ウルギー県のアルタイ郡で目にした洗い方は、仔羊を一頭ずつ持ち上げて川に投げ入れるというものだった。女性がヒツジを追いかけて捕まえ、男性がそれを受け取って川へ投げ入れる(写真4・5)。ある牧畜民男性は「ヒツジをできるだけ遠くに飛ばさないといけない」と、仔ヒツジを持ち上げ、そのまま川岸でグルグルと回って遠心力をつけ、ぽいっと勢いよく川へ投げ入れた。簡単そうに見えるが、仔ヒツジ一頭の重さはおおよそ15～20kg。これはかなり腰に負担がくる仕事だ。仔ヒツジをできるだけ遠くに飛ばすことによって、毛をしっかりと洗うことができ、また水位の低いところに落下して仔ヒツジの身体を傷つけることを防ぐ。一頭のヒツジを、何度も捕まえて、何度も川へ投げ込む。

その後、しばらく放置して毛を乾かしたあと、毛を刈る作業に移る(写真6)。毛刈りは主に男性がおこなう。一頭の毛は5分程度で刈られてしまうが、100頭以上の仔ヒツジの毛を全て刈るのだから、単純計算して500分。複数の人間で作業するとしても、夜までかかる大仕事だ。しかし、この作業をおこなわなければフェルトを作ることすらできない。



写真3 仔ヒツジを川へ投げて洗う



写真4 仔ヒツジを集めている様子。柵などは利用しない。



写真5 仔ヒツジを集める女性



洗う



写真6 仔ヒツジの毛刈り

フェルトを作る工程

1



写真7 毛をたたいてほぐす作業

2



写真8 ほぐした毛を均等に重ね並べて積層する

写真9 毛
えたら巻
外へ持ち

5



写真12 肘で転がして圧縮する

4



6



7



写真13・14 ある程度固まったら今度は直接フェルトを肘で圧縮する。

秋のフェルト作り

重労働はさらに続く。8月中旬になると、今度は先に得た仔ヒツジの毛をフェルト化する作業をおこなわなければならない。これは主に女性を中心となっておこなう。フェルトを作る工程の流れは次のとおりである。

* * * * *

- ① 毛が飛ばないように、住居内で毛を広げ、柳の枝で叩いてほぐす（写真7）。
- ② ほぐした毛を手で少しずつひっばって繊維の向きを整えつつ、植物を編んで作った簾（すだれ）のような防砂壁の上に均一に重ねる。同時に、毛をより柔らかくするためにやさしく叩いて解す（写真8）。
- ③ 防砂壁をまるめて外へ持ち出し、少しずつ防砂壁を広げながら熱湯を毛にかける（写真9、10）。
- ④ バラバラの状態の毛をまとめるために、防砂壁に紐を巻きつけて固定し、その紐を引っ張って足で転がす（写真11）。毛の量が多い時は、これをウマあるいはラクダといった大型家畜に引っ張らせる。
- ⑤ ある程度転がしたら紐を外し、今度は肘を使って防砂壁を転がし圧縮する（写真12）。
- ⑥ フェルト化を確認しつつ、湯をかけ足し、圧縮を繰り返す（写真13）。
- ⑦ ある程度フェルト化が進んだら、防砂壁からフェルトを取り出し、腕で直接転がし圧縮を繰り返す（写真14）。
- ⑧ フェルト化したら冷水で洗い流し、しばらく放置して乾燥させる（写真15）。
- ⑨ 2日後に再び熱湯をかけて⑤～⑧の作業を繰り返し行い、乾燥させて完成。

* * * * *



写真10 お湯をかける

写真11 紐で縛り、転がして圧縮する



写真15 冷水で汚れを洗いおとす

9 2日後に再び熱湯をかけて⑤～⑧の作業を繰り返し行い、乾燥させて完成！



写真16 フェルトの敷物「サルマック」



写真17 フェルトの敷物「サルマック」



写真18 フェルトの敷物「サルマック」

仔ヒツジ 100 頭分の毛を扱う場合、①の毛をほぐす作業だけでも朝から晩までかかるという。中にいれた毛をフェルト化させるために、固い葦の防砂壁を肘で転がす作業をおこなうが、肘には相当の痛みが走る。ある牧畜民女性は色に変色した肘を私に見せて、「辛いし痛いから来年はもうやめようかと思っている」という。さらに、フェルトを作る時期である 8 月上旬～中旬は女性にかかる労働負担が大きい。その理由は、冬に家畜に与える草を準備するために、男性が家を留守にして草刈りに出かけてしまうことによる。牧畜民女性にとっては、ただでさえ毎日忙しいのに、男性がいない分やるべき仕事が増えて、その上フェルトまで・・・と、悲鳴をあげたくなるような時期なのだ。

想いがつまった敷物

このように、フェルト作りはそこに至るまでの作業と牧畜民の生活事情を含めて考えると、男性も女性も家族全員が協力し合わなければ成しえることができない仕事である。そして、そうした重労働を経て作られたフェルトを用いて、敷物サルマックは作られている。

しかし、昨今は工場で作られたフェルトが簡単に市場で手に入る時代である。にもかかわらず、カザフ牧畜民が未だに多くの時間と労力を費やしてフェルトを作り続けているのはなぜだろうか。もちろん、先の女性のように、もうやめようと思っている人は年々増えているだろう。しかし、私がこれまで出会ってきた年配のカザフ牧畜民は、「サルマックは仔ヒツジのウイ・ジュンのフェルトで作らないと……」と、素材に強いこだわりを示す。

たとえば、ウルギー市在住のあるカザフ人女性に聞いた、こんなエピソードがある。モンゴルが社会主義体制であった頃、全ての畜産物は国家の管理下あり、個人の家庭で所有することはできなかったといわれているが、カザフ牧畜民はそんな時代においてもサルマックを作り続けていたという。

「国に言われて羊毛を回収しに来る人（カザフ人）がいて、その人にサルマックを作りたいからウイ・ジュンは持っていかないでくれってお願いしたのよ。娘が嫁に行くから贈り物としてサルマックを作らなくちゃいけないのって説明して、必要な分だけ分けて目をつぶってもらったの」。

このエピソードからは、カザフ人がサルマックを作るな



写真19 自作のサルマックを敷いて見せてくれたカザフ女性とその孫。



写真20 フェルトを縫い合わせ敷物を作る

らば良質の素材で作りたいというこだわりを抱いていること、そしてカザフ人同士がサルマックを作ることの重要性を共通認識として持っていることが感じ取れる。

材料であるフェルトが大変な労力と時間とこだわりをもって作られていると知った上で、改めてサルマックを見直すと、カザフ人にとってのこの敷物が単なる敷物だとは思えなくなる（写真16・17・18・19）。手をかけるのは材料づくりだけではない。作り手たちは敷物の縫製にも手を抜かない。しっかりと丈夫な敷物を作るために、フェルトを染めて防虫対策をし、全面に刺し縫いをし、羊毛の紐を縫い付けて補強し、美しく仕上げるために裏面に出る糸の量にも注意し……一枚のサルマックを一人の女性が一か月以上かけて丁寧に縫い上げるのだ（写真20）。一体、カザフ人はこのサルマックという敷物を、どのような想いを込めて製作しているのだろうか。彼らの眼にはサルマックはどのように見えているのか・・・敷物一枚を眺めながら思いだされる物語が増えれば増えるほど、その答えに近づけるのかもしれない。

地方のアーカイブでの苦悩から

―断片的な史料とリファレンスのネットワーク

中尾 世治（総合地球環境学研究所・プロジェクト研究員）

口頭伝承から史料の調査へ

西アフリカのブルキナファソでの長期調査を始めてから 1 か月ほど経ったころ、私は植民地統治期の行政文書を探してみようと決意した。ダフィンという民族の暮らす各地の村やそこにあるモスクをまわって、植民地統治以前の小規模なジハードについての口頭伝承や村の起源譚などを村長やモスクのイマーム（指導者）から聞き取る調査はあらかた終わっていたが（図 1）、当時は、その内容で博士論文を書けるほどの分量には至らないと思っていた。何か突破口を見つけたかった。

日本から持ってきていた先行研究に私は希望を見出した。2000 年の論文のなかに、地方都市のデドゥグにある高等弁務官事務所のアーカイブに保管されている植民地統治期の行政文書を用いた記述があったのである。手がかりは、高等弁務官事務所とデドゥグという名前だけだった。とにかく、デドゥグにむかった。

デドゥグでは、朝から様々な部署をたらいまわしにされたが、夕方には高等弁務官事務所にたどりついた。いかにも忙しく、いかにも高位な人物を前に気圧されながらも、珍妙なフランス語で、自己紹介とこちらの意向を伝えたのちに、首都で 1 週間かけてすでに取得していた調査許可書を手渡した。おそらく調査許可書が効いたのだろう。存外、あっさりと閲覧を認めてもらい、その場で担当者に電話をかけ、文書が保管されている建物の行先を教えてくれた。

その建物に行ってみると、電話をかけた人物が、部屋のカギを開けて、ロッカー 2 つに雑然と突っ込んであるだけの書類の束を指さして言った。「植民地時代のものがどこにあるのかはわからない。ここのどこかにあるだろう。まあ、探してみな。」

地方のアーカイブでの苦悩

つくづく写真を撮っておけばよかったと今は後悔しているのだが、当時はそんな余裕はなかった。山のように積まれた文書は自分の研究の袋小路を抜け出す宝の山に見え、とにかく、すべての文書に早く目を通そうと試みた。とにかく、植民地統治の最初期の古い文書をみたいと思っていた。聞き取り調査では、植民地統治以前の歴史を聞いて回っており、その手がかりが欲しかったのだ。

少なくとも、先行研究で使われている古い文書は見つけどう——。そう思って、文書のタイトルと作成年をチェックし、重要なものとそうでないものとを、これも違う、あれも違う、と選り分けていった。そうした作業を丸 2 日間やって、愕然とした。作業を始めた時点では、山のようにあるようにみえた文書のほぼすべてが重要でないものに分類されてしまったのだ。いくら探しても、先行研究で用いられていた古い文書はおろか 1930 年代以前に遡る文書はほぼ皆無だった。

残されていた文書の大半は 1940 年代後半以降のものであり、ひどく断片的なもののばかりであった。たとえば、行政



図1. ダフィンのシウ村のモスク
（撮影者：中尾世治）

単位ごとの定期報告書ですら、すべての年次のバックナンバーが揃っていなかった。

大きく落胆したのだが、何とか研究の糸口を見つけなければならない。たとえ年代が新しくとも、たとえ情報が断片的であっても、何か引っかかるものがあれば、史料の写真をとっておこうと方針をあらためた。

史料の読み方とリファレンスのネットワーク

そうして読むと、年次報告書は格別に輝いて見えてきた(図2)。そこには、人口、気候、民族間関係、宗教情勢、農業、商業などについての一般的な情報が書かれてあるのだ。あるいは、A4で半ページほどの報告にもローカルな有力者の人名が書き込まれていることに気がついた。この地域でのイスラームの伝播について、村々のモスクを回って、設立年代や修学先などの聞き取りを行っていた私は、語られていた古いモスクの創設者などの人名が文書に現れてくることに興奮した。

特定の政治家がある村を訪問したこと、独立直前の選挙での混乱、村の境界をめぐる争いなどについての報告、村長の任命書や俸給の改定をさだめる文書などを写真に収めていった。しかし、よく読んでみると、これらの文書が、本来は他の膨大な文書とのリファレンス(言及・引用)のネットワークのなかに位置づけられることがわかってきた。

たとえば、特定の政治家がある村を訪問したという報告には、すでに前日や1週間前の報告を踏まえているというようなことが書かれているのだが、いくら探しても、そうした先行する報告が見つからなかった。あるいは、俸給の改定の文書などには、先行するいくつかの「法令を踏まえて以下のことを決定する」といったような文言があるのだが、やはり、そうした先行する法令の文書はなかった。また、それらの文書で言及されている人名や政党名について、その当時の私は何も知らなかった。つまり、行政文書にある断片的な情報は、他の膨大な行政文書を読むことによって、正確に位置づけられるようになるのである。

断片的な史料のなかでの拘泥

これは、もっと正確に調べなくてはいけない。そう考えて、他のやり残していた聞き取りや訪問を終えた後に、私は農村から首都へと戻った。そして、ブルキナファソ国立公文書センターに通い詰め、隣国のコートディヴォワールの国立公文書館、フランス国立海外公文書館での調査へと展開していった。

たしかに、これらの公文書館では文書は整理され、また重要なものが多く残されていた。デドゥグでみていたようなものとは比べものにならないほどの情報量をもった文書

に出会うことが多くあった。これらの文書館で得た文書なしには博士論文を書くことはできなかつただろう。

しかし、一方で、根本的な問題はまったく解消されなかった。というのも、フランス国立海外公文書館の史料、あるいはそこにマイクロフィルムのかたちで残されているセネガル国立公文書館の史料においても、文書が網羅的に残されていることは例外的であった。オート・ヴォルタ植民地の年次報告書ですら、別々に保管・登録されており、それらすべてをまとめても完全に網羅的なものとはならなかった。法令はすべて官報に書かれていることは理解できたが、それを網羅的に収集することは63年間ひと月に1回以上刊行されている官報をすべて写真に収めることであり、現実的ではなかった。そうして考えると、公文書館の文書のほぼすべてを写真に撮らなければならない、撮ったものをまた分類し直すことが必要になるように思われた。これでは公文書館との同化である。そのため、細かく読んでいき、関連する可能性のあるものを集めなければならない。

ともあれ、結果的にみれば、断片的な文書をちまちまと捨てずに読んでいくという研究手法は独自の意義をもったように思われる。ほとんどの先行研究では、情報量の多い文書ばかりに依拠して論じていたため、そうした文書の残っている地域や時代に偏りが生じていた。海外の博士論文のなかには、仏領西アフリカの歴史研究にもかかわらず、フランス国内の公文書館にある文書のみで書かれているものもある。もちろん、それらの研究にはそれぞれの意義があるのだが、やはり、偏りは否めない。たまたま、私は地方に残された断片的な文書に最初に出会ったため、断片的な情報に拘泥することができた。デドゥグで味わった出口の見えない経験は、それはそれで重要な意味を持っていたのである。



図2 デドゥグのアーカイブに残された年次報告書
(撮影者：中尾世治)

トルコの木版プリント 「バスク」の世界

成原 さと子 (バスク屋さん)

トルコには「バスク」という伝統工芸があります。

バスクとは、トルコ語でプリントを意味し、木版プリントは伝統的にタシュ・バスクといいます。ただし、タシュとは、土を意味し、現在の木版プリントと混乱することがあります。そのため、現在では、布を意味するタフタという言葉を使ってタフタ・バスクということが多くなっています。

ここで、多くの方が興味を持ったであろう二つの点についてご説明しましょう。

まず、バスクはトルコ語のプリントからきており、スペインのバスク地方とは関係ありません。

次にインドとイランはともかく、トルコに木版プリントがあるのかという疑問。

トルコには古くからの木版プリントの技術が受け継がれているのです。

いつ頃から木版プリントが盛んになったのか、確実な時期はわかりませんが、オスマン・トルコの時代には、バスク製品に税金をかけ、その徴税を確かにするため、中央アナトリアの黒海に近いトカットという街に、バスクの工房を集中させました。そのためこのトカットという田舎の街で、オスマン・トルコのバスク技術は栄えていったのです(写真1)。

このトカットへのバスク工房の集中は 100 年ほどで終わ



写真 1. トカット城を臨むトカットの街



写真2. オヤで縁取られたヤズマの一例

りを告げ、トルコ各地のイスタンブール、ブルサなどの各都市へとバスク生産の拠点は変わっていきました。

1800 年代は、厚手コットンや、シルクの布にバスクをし、飾りのタペストリー、敷物、あるいは女性が体を覆うほどまですっぽりと被る布へと使われました(写真2)。

1900 年代以降のもので、今現在手に入りやすいのは、「ヤズマ」といわれる女性のスカーフです。薄手のコットンやシルクにバスクを押した艶やかで素朴なヤズマ類は沢山作られ、縁を「オヤ」と呼ばれるレース編みで飾られ、女性の嫁入り道具として多数用意されました(写真4)。

1970 年代以降は、バスクの代わりにシルクスクリーン、そしてデジタルプリントへとスカーフの主役は移り変わり、現在では、お年を召した方が嫁入り道具の長持ちを開けてくれた時くらいしか目にすることはなくなりました。

現在、バスクの工房は、大変少なくなり、職人の数も減



写真3. 厚手のバスク布

写真4. 嫁入り道具のオヤで飾られた
ベッドイズニク地方の風習



りました。ましてや手彫りで木版を彫る職人はトルコ全土でも数えるほどです（写真5）。

トカット県では今一度バスクの文化を見直し、技術を継承させようと、職業訓練校にバスクの授業を作ったりしています。

私はトカットにアトリエを構える先生に教えをうけ、バスク修行の道へと入りました。日本では、バスクをしている方は全くおらず、トルコでさえ、本格的に技術を教えてもらえるところは数えるほどすくない。

私はこの出会いから、バスク修行に入れて、とても幸運だったと思います。

また、私のバスクについての取り組みを記録としてブログ⁹⁾に記載しております。興味のある方はぜひ、ご参照ください。

皆様に少しでもトルコのバスクに興味を持っていただけたなら幸いです。

＊）バスク屋さこのバスク道

～ 12 人目の認定職人になるために～

<https://ameblo.jp/basukuyasan/>



写真5. 丸太から、独特
の道具で木版を彫る

本の紹介

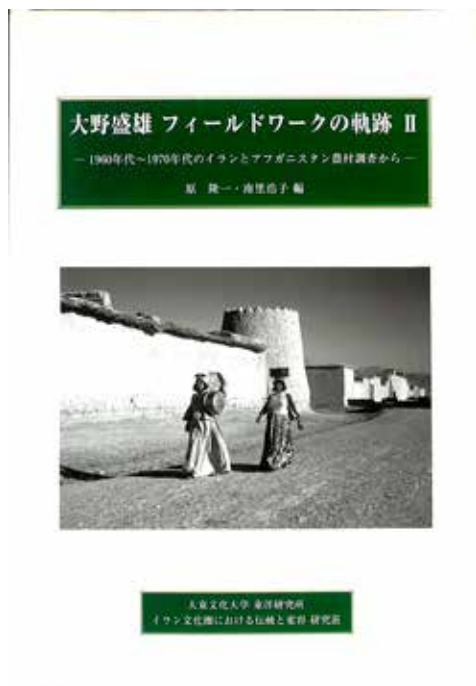
沙漠にかかわる、さまざまなジャンルの本を紹介します。



原 隆一

『大野盛雄フィールドワークの軌跡Ⅱ—1960年代～1970年代のイランとアフガニスタン農村調査から—』

原 隆一・南里浩子 編
大東文化大学東洋研究所



本書は、『大野盛雄フィールドワークの軌跡』シリーズの第2巻目（全5巻予定）にあたる刊行物である。ここでは、大野氏が西アジア地域のイランやアフガニスタン農村の定点調査に本腰を入れ臨地研究に集中する1960年代初期から、1970年代の終わりまでのおよそ20年間の調査研究に焦点をあてて、その軌跡を追ったものである。

大野氏は、1960年代前半（1964年と1966年）に、イランの5つのむらの調査を単独でおこなっている。また、1970年代になると、全3回の科研費による共同調査を企て、1970年、アフガニスタンでの2つのむら調査（第1次）、1972年、イラン南部ボレノウむら調査（第2次）、1974年、同じくイラン南部ヘイラーバードむらで長期にわたる住み込

み調査を行っている。その時に残された手紙、日誌、フィールドノート、調査一次資料などの手書き文書や写真記録などを整理、再検討し解説をくわえたものが本書である。

この時期は、氏がこれまでの現地調査の経験を踏まえ、40才前後のフィールドワーカーとしてまさに油がのりきった年令にあたり、調査研究に没頭していた頃にあたる。残された手書き資料などを細かく読みかえすと当時の大野先生の息吹や意気込みといったものがひしひしと伝わってくる。

また、この時期のおよそ20年間に記録され残されたイランやアフガニスタンの村落調査資料は、氏の研究上で最も密度が濃い重要なものであり、後に続く研究者たちが継続調査するための基礎データを提供している。実際、私たちは、これらの残された一次資料を利用して2004年から4年間にわたって同地方の追跡調査を実施した（2004～2007年度、代表者：原 隆一「イラン・ザグロス山地コル川流域の40年の変容」）。その成果は、後藤 晃 編著『オアシス社会50年の軌跡—イランの農村、遊牧、そして都市』（御茶の水書房、2015年3月）として公刊済みである。

1960年代、イランでの農村調査は、全国5カ所の農村をそれぞれ1ヶ月間の単独住込み調査で行われたものである。1963年2月からアジア経済研究所の研究費を得てテヘランに2年間滞在し、ペルシア語を一から学び、1964年には3つの農村調査（ベヘジャトアーバードむら、サーアトルーむら、ヘイラーバードむら）を、また、1年を置いて1966年に再び日本学術振興会の資金でイランを訪れた際、氏はさらに2つの農村調査（エブラヒームアーバードむら、チャムむら）を行った。

1970年、大野氏45才の時、科研費による海外学術共同調査を企画、実施する。「西アジア農村の人文地理学的調査」（全3回）である。その第1回目がアフガニスタン農村調査で、5人の隊員を率いて6人で2つの農村（カバービアンむら、ピアルウケールむら）に、それぞれ1ヶ月間の住込み調査を行った。この調査において、氏は、これまでおこなってきた農村の社会経済構造（社会の骨組み）のみを調べる研究方法に疑問をもちはじめ、血や涙の通った農民像を追求するという新しい試みに挑戦するようになる。

それらは、「ツ＝パイダ論」、「社会的網の目論」、「金魚ば

ち論」、コミュニティ社会全体をとらえようとする「生活様式論」、つまり、生産と生活の組み合わせとその変化をまるごと追求しようとするアプローチなどの提示である。それは、たんに客体を客観的にとらえようとする科学的な「フィールドワークの技法」だけでなく、主体と客体との関係性を積極的に考えようとする「フィールドワークの思想」へと思索を上昇展開する大きな転換期にあったと言えよう。

1972年、『西アジア農村の人文地理学的調査』の第2回目の農村調査は、メンバーの一部と場所を変えて実施される。それは、イラン南部の農村ボレノウむらという1つの集落に半年間に及ぶ長期の集団による住み込み調査であった。大野氏のオリジナルである記録法、手紙形式による手紙日誌から、氏のイランの農村調査の研究内容と方法が顕著にでてくるのもこの頃からである。

1974年、科研費調査の第3回目もイラン南部ヘイラーバードむらで半年ちかくにわたる長期の住み込み調査であった。もちろん、長期住込み調査は、むらの住民との関係、公安やその他の公的機関との関係などクリアすべき問題が多々あり、かつ実態調査を実施する上で、むら社会との相克

もあったこともたしかである。困難な問題をかかえながらも、大野氏は、自身のライフワークとなる定点調査法におけるベースキャンプをここヘイラーバードむらに定め、時代や社会の影響をうけながら変化する農村やむら人たちの姿を長期にわたって追い求める方法に集中することになる。その成果のひとつは、『イラン農民25年のドラマ』（NHKブックス、1990年）としてすでに公開されている。

＊＊書誌情報＊＊

原 隆一・南里浩子 編『大野盛雄フィールドワークの軌跡Ⅱ—1960年代～1970年代のイランとアフガニスタン農村調査から—』、大東文化大学東洋研究所、2018年3月、B5判、223頁、本体7,000円＋税、ISBN：978-4-904626-33-7

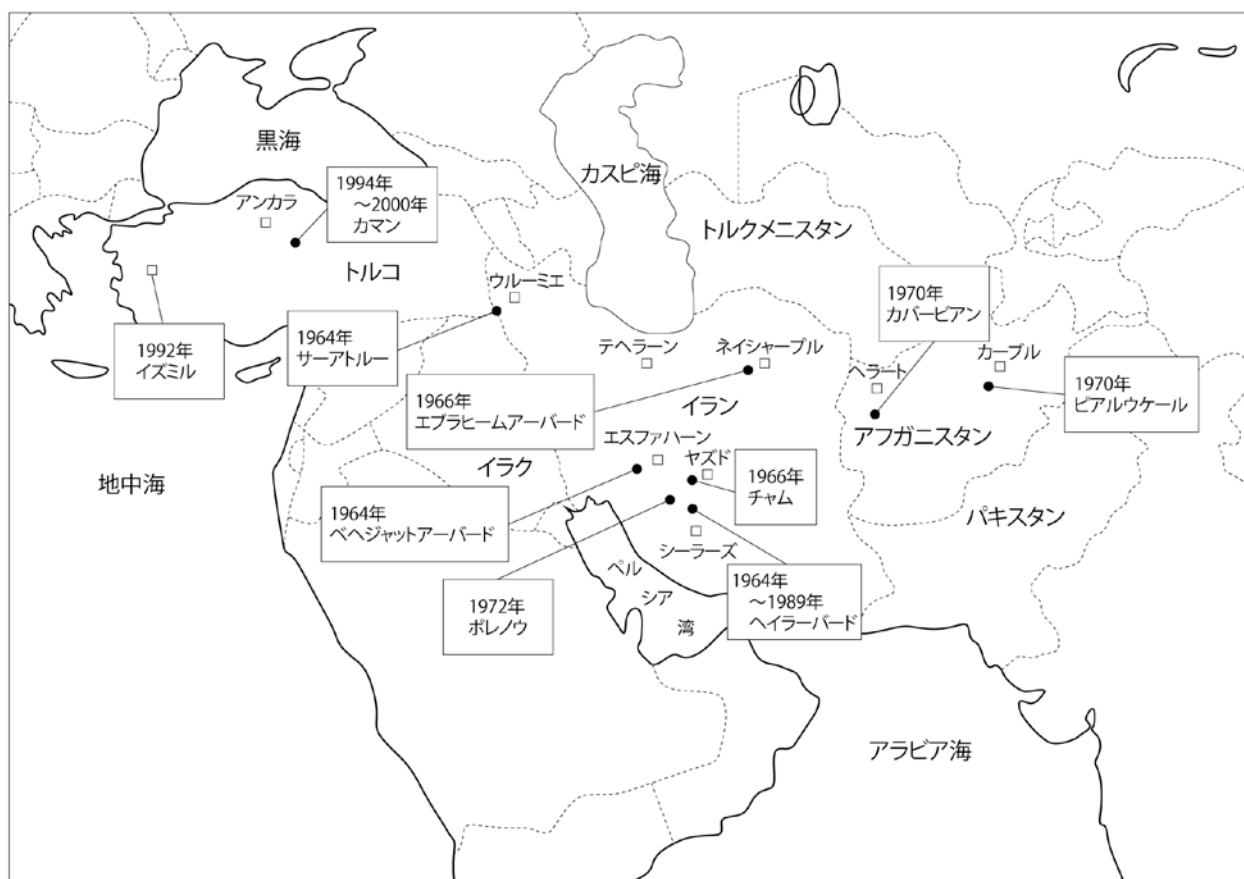


図1. 西アジア地域（イラン・アフガニスタン・トルコ）の調査地点

「アラビア半島の文化遺産保護の現状と展開 サウジアラビアを中心として」開催報告

藤本 悠子（片倉もとこ記念沙漠文化財団）

2017年12月16日、横浜情報文化センター 情文ホール（横浜市）において、人間文化研究機構「現代中東地域研究事業」秋田大学拠点他との共催で、国際シンポジウム「アラビア半島の文化遺産保護の現状と展開 サウジアラビアを中心として」を開催いたしました。

基調講演者として、当財団とも関係性の深いサウジアラビアのキング・ファイサルセンターと、サウジアラムコが設立したキング・アブドゥルアジーズ世界文化センターから学芸員各1名が参加しました。

【内容】

開会挨拶 片倉邦雄（片倉もとこ記念沙漠文化財団）

基調講演：Farida Alhusseini（キング・ファイサル・センター）
「キング・ファイサル・センター所蔵資料とイスラーム研究資料の再整理」

基調講演：Idries Trevathan（キング・アブドゥルアジーズ・世界文化センター）

「イスラーム美術とサウジ・パブリック：キング・アブドゥルアジーズ・世界文化センターによる民衆調査」

パネル・ディスカッション：パネリスト（Farida Alhusseini、西尾哲夫、縄田浩志、竹田多麻子）

コメント1：西尾哲夫（国立民族学博物館）

「国立民族学博物館での取り組み」

コメント2：縄田浩志（片倉もとこ記念沙漠文化財団）

「片倉もとこ中東関連資料のアーカイブ化について」

コメント3：竹田多麻子（横浜ユーラシア間）

「横浜ユーラシア文化館での取り組み」

閉会挨拶

【共催】人間文化研究機構「現代中東地域研究事業」秋田大学拠点／人間文化研究機構「現代中東地域研究事業」国立民族学博物館拠点／国立民族学博物館「フォーラム型情報ミュージアム」プロジェクト／国立民族学博物館「新学術領域研究（研究領域提案型）『学術研究支援基盤形成』研究基盤リソース支援、プログラム 地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化」プロジェクト／片倉もとこ記念沙漠文化財団

また、各参加者は、2017年12月17日、国立民族学博物館にてバックヤードを見学し、その後、同博物館にて、同館の中東地域研究者や、人間文化研究機構「現代中東地域研究」関係者らが参加し、ワークショップを実施しました。今回のシンポジウムを経てキング・ファイサル・センターと当財団との間で2018年5月調査、デジタルアーカイブ、展示に関する覚書を締結しました。これにより今後の調査研究の発展が期待されます。

調査スケジュールと調査に対する現地の反応

藤本 悠子（片倉もとこ記念沙漠文化財団）

調査の目的

2018年4月28日～5月18日、サウジアラビア遺産観光庁の許可の下、サウジアラビアを訪問し、マッカ州ワーディ・ファーティマ地域において調査を行いました。当財団からは、縄田代表理事、石山理事、河田理事、郡司理事、藤本事務局主事、渡邊特別研究員、メレー・アナス企画委員会委員長ら8名が参加し、国立民族学博物館から菅瀬晶子氏にも参加いただきました。

片倉もとこ（1937-2013）は、文化人類学者・地理学者としてサウジアラビアをはじめとする中東地域の遊牧民やイスラームの研究に従事してきました。特に、1968年12月～1970年8月にかけて、サウジアラビア王国マッカ州のワーディ・ファーティマ地域を対象として行った調査は、その研究活動において大きな意味を持つものでした。

この時の調査の内容は、東京大学理学部地理学教室での博士論文（An Anthropogeographical Study of Saudi Arabian Bedouin Communities／サウジアラビアにおける遊牧民社会の人文地理学的研究）にまとめられ、後に、東京大学出版会より“Bedouin Village -A Study of Saudi Arabian People in Transition”. (Katakura, 1977) として出版されました。片倉は、その後、2013年に、「人生最期のフィールド・ワーク」に旅立つまで、ワーディ・ファーティマを数度にわたって訪れ、その変化を記録し続けてきました。

当財団による、今回のサウジアラビア調査の目的は、片倉の調査研究のフォローアップ調査であり、調査を通じてワーディ・ファーティマの半世紀の変化を明らかにしようとするものです。

調査のスケジュール

2018 年の調査は、以下のスケジュールで実施されました。

4 月 28 日（土）：成田出発

4 月 29 日（日）：ジェッダ到着

4 月 30 日（月）

ジウムムにて、サウジアラビア観光庁の Omar 氏と調査に関する打合せ。ワーディ・ファールティマ社会開発センターの Faiz Fawzan Al-Otaibi センター長を表敬訪問し、調査の方針について説明。

5 月 1 日（火）～ 4 日（金）

ワーディ・ファールティマにおける片倉もとこ調査のフォローアップ調査および、ワーディ・ファールティマ社会開発センターに収蔵されている民具の記録。（全員参加）

2018 年 5 月 5 日（土）以降は、縄田、菅瀬、石山、藤本ら、リヤド行きのメンバーと、ジェッダに残ってワーディ・ファールティマ地域のフォローアップ調査およびワーディ・ファールティマ社会開発センターに収蔵されている民具の記録を行うグループに分かれる。（郡司、河田、遠藤、渡邊、メレー・アナス）

（リヤド組）

5 月 7 日（月）～ 5 月 9 日（水）

キング・ファイサル・センター、サウジアラビア遺跡観光庁表敬訪問

5 月 9 日（木）：リヤド組帰国

（ジェッダ、ワーディ・ファールティマ組）

5 月 6 日（月）～ 5 月 17 日（木）

ワーディ・ファールティマにおける片倉もとこ調査のフォローアップ調査（女性の生活、衣装）および、ジッタの博物館等における女性の衣装の変遷に関するインタビュー調査（郡司、河田、藤本）

ワーディ・ファールティマにおける片倉もとこ調査のフォローアップ調査（景観）および、ワーディ・ファールティマ社会開発センターに収蔵されている民具の記録。（遠藤、渡邊、メレー・アナス）

5 月 18 日（金）：ワーディ・ファールティマ組帰国



ワーディ・ファールティマでの調査風景

調査に対する現地の反応—メディアによる紹介から—

今回の調査のもようは、現地の人々の関心を集めました。以下、現地メディアで紹介された、キング・ファイサル・センターと当財団との覚書締結式や、ワーディ・ファールティマ社会開発センターで開催されたシンポジウム、郡司みさお理事、藤本悠子事務局主事らによるジェッダ女子工業大学の表敬訪問、に関するデジタル記事の邦訳を紹介します。

「キング・ファイサル・センター、サウジ文化遺産普及のため日本の「片倉もとこ財団」と提携」、国営情報局（2018 年 5 月 10 日付）

キング・ファイサル・センターは、片倉もとこ記念沙漠文化財団と、サウジアラビアの文化遺産を広め、双方の知識や経験を交換するため、昨日 2018 年 5 月 9 日（1439H シャアバーン月 23 日）に覚書（MOU）を締結した。

同協定は、リヤドのセンターオフィスにおいて、センター事務局長の Dr. Saud Al-Sarhan および財団代表理事の縄田浩志博士によって署名された。

Al-Sarhan 博士によれば、本協定は、センターおよび日本の片倉もとこ財団が、相互の関心ある分野において協力を強め、技術、知識、援助を交換する意欲を具体化したものである。

協定の内容としては、財団のサウジにおける研究目的の支援、財団の写真アーカイブのセンターでの紹介、王国での展示会共催（2020-21 年）、双方の知的・人的交流などについてが含まれる。

この協定は、キング・ファイサル・センターがある限り、学術交流の懸け橋として、文化関係の強化と知見の交流、特に指導的大学、学術団体、出版、教育機関などとの知見の交換を強化することを目指している。

「片倉もとこ記念沙漠文化財団の調査隊が、ワーディ・ファールティマ社会開発センターを訪問」、マッカナウ電子版（2018 年 5 月 4 日付）

日本の文化遺産財団から、縄田浩志教授率いる代表団が、遺産観光庁との学術交流の一環として、マッカ労働社会発展省附属ワーディ・ファールティマ社会開発センターを訪問した。これは、1968～70 年に日本の片倉もとこ博士が沙漠の人々の生活に関して、ファールティマの谷を選び「ワーディ・ファールティマのベドウィン・ビレッジの経済構造」と題して実施した研究調査の延長である。

ジウムム郡長の Omran Al-Zahrani、マッカ社会発展労働省副事務局長の Hussein Kadeer は、日本からの代表団を歓迎し、必要な便宜、情報提供面においてあらゆる支援を行うと言及した。これに伴い「ワーディ・ファールティマ社

会開発センターの今昔」と題したプレゼンが行われ、センターの過去50年以上にわたる財団との調査実施における成果がまとめられた。

その後、調査団は今後の調査研究の進展・情報収集・訂正の方法について議論し、資料室を訪問し、表彰を受けた。

「日本は58年前に始まった“ファータィマの谷”の調査を完成させる」、アルマディーナ新聞、(2018年5月23日付)

日本のワーディ・ファータィマへの敬愛の念に導かれ、片倉もとこ記念沙漠文化財団は58年前、1960年に開始された谷での調査を完遂するため訪れた。

財団代表として、郡司みさお理事、藤本悠子事務局主事が、ジェッダ女子工業大学に招かれ、学長のNada Naji Zarnouqiは代表団を歓待した。

同組織は、故片倉もとこ教授によって設立され、教授は沙漠文化を調査するため何十年もフィールドワークを行い、とくにサウジアラビアにおいて人口変化および生活変化のおこった1960年からジェッダ近郊のワーディ・ファータィマにおいて実施した。財団の王国への訪問は、ワーディ・ファータィマおよびジェッダでの片倉もとこが行ってきた調査をもとにしたフォローアップを目的としており、伝統的なアラブ女性の民族服飾などの物質文化を対象とする新たな調査に焦点を当てている。

そこで、ジェッダ女子工業大学は、デザイン技術部門、衣服生産にくわえ、伝統衣装の経験をもとにした技術訓練を含むため、本研究の拠点の1つに選ばれた。

財団は、女性のファッション（とくに刺繍）の技術についての最大の変化について知見を得ることを調査目的としており、また企画しているアラブ女性の生活に関する展示



キングファイサルセンターとの覚書締結

のための専門的意見を求めて、大学の衣服部門の訓練生にインタビューを行った。またデザイン部門を見学し、伝統柄を利用しモダンなデザインに仕上げる高水準の訓練生に感嘆した。

半世紀前のワーディ・ファータィマ地域における、一般の人々の暮らしがどのようなものであったかを知ることができる写真、文字記録は、サウジアラビア国内でも類例がなく、当財団の調査に対しても、高い関心を寄せていただけたようです。

なお、調査の成果については、次ページからの郡司理事の「半世紀の時をうめる謎解き—女性衣装のなぞを追いかけて」を皮切りに、次号以降も順にお伝えしていく予定です。片倉もとこが撮影した写真や、彼女の遺した記録と、今回調査隊が撮影した写真をふんだんに使い、変化するサウジアラビアの様子をお伝えできれば幸いです。

国立民族学博物館にて、当財団共催企画展開催のお知らせ サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年—「みられる私」より「みる私」

片倉もとこが半世紀前に撮影した写真をもとに、当財団によるフォローアップ調査の結果もまじえながら、サウジ女性の生活文化の変遷をたどります。

- 【とき】 2019年6月6日（木）～9月10日（火）
- 【ところ】 国立民族学博物館 本館企画展示場
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
TEL:06-6876-2151（代表）
- 【アクセス】 大阪モノレール「万博記念公園駅」
「公園東口駅」より徒歩15分
近鉄バス「日本庭園前」より徒歩13分
- 【開館時間】 10:00～17:00（入館は16:30まで）
- 【休館日】 毎週水曜日
- 【観覧料】 一般580円／大学生250円
高校生以下無料



半世紀の時をうめる謎解き—女性衣装のなぞを追いかけて

郡司 みさお（片倉もとこ記念沙漠文化財団）

中央アジアから北アフリカにわたる民族服飾は乾燥地の気候風土に適応するもので、貫頭型長衣、パンツ、頭部の被り物を基本とし、さらに前開き型の外衣を上から羽織るのが一般的だ。調査地、サウジアラビア西部のワーディ・ファールティマも例外ではない。身幅の広い貫頭型長衣は風通しがよく、一日5回のお祈りの際にも動きやすい。また、腰回りがたっぷりとし足首の部分を締めたパンツは、サソリや蛇、虫、砂埃を防ぐ。さらに頭部を布で覆い肌の露出が少ないことは、汗の蒸散を防ぐことに役立つのである。このような衣装は、乾燥地の気候にはもちろん、遊牧生活という基層文化にも適していたからこそ、長い歴史にわたってほとんど変わることなく面々と引き継がれてきたと言える。

ワーディ・ファールティマの衣装を探して

一般的に、サウジアラビアには地域、部族に関わらず、「ハダリーヤ（町に住む人々）」と「ベドゥ（沙漠を移動する遊牧民など村の人々）」の文化があるといわれる。ジッダ（ジェッダ）、マッカ（メッカ）、ワーディ・ファールティマを含むヒジャーズ（ヘジャズ）地方も同様で、ジッダなどの町に住む人たちの文化と、ワーディ・ファールティマの定住民、半定住民、遊牧民の文化は大きく異なる。そこで、「衣装」の調査はワーディ・ファールティマに特化し、この地における半世紀前の女性衣装、特に片倉もとこが撮影したタイプのもを、国立民族学博物館と当財団の所蔵品写真リストから探すところから始まった。

片倉が最も多くの時間を過ごし調査していた現地ワーディ・ファールティマにある二つの村、ブシュールとダフ・ザイニーにおいて約20名の女性と、当時の事情に詳しい1名の男性から聞き取り調査を6回にわたって行い、さらにサフィーヤ・ビンザグル・ギャラリーのオーナー、アルタイバート・シティ・ミュージアムの学芸員に確認したところ、国立民族学博物館ならびに当財団で所蔵している衣装にはワーディ・ファールティマで作られた、または着用されていた女性用下着はあるものの、貫頭型長衣は1枚もないことが明白となってしまった。実をいうと、この衝撃的事実は調査前に数々の文献を調べたとき、双方の所蔵品リストにある衣装のほとんどが、イエメンやサウジアラビア南部、中部のものである可能性が高い、とだいたいわかってはいた。だから、ある程度の覚悟はしていたものの、「ワーディ・ファールティマの衣装が無い」ことが明白になると、正直に

言ってやはりショックだった。私の調べ方はまだ甘いだろうから、何か新たな発見があるに違いない、と期待していたのだ。

しかしながら、なんと偶然にも、まったく期待していなかった個人蔵（Gコレクション）の写真集を見せたとき、村の人々が口を揃え、「これ！これはワーディ・ファールティマにあった！」と即答し、同時に誰もが指差した衣装が2点あった。いずれも、プリントやジャガード織りの花柄生地を使用して、ミシンで縫われたフスターン（ワンピース型長衣）である（写真1、2）。写真1（GC046）は1989年当時、アッリヤード（リヤド）市内にある女子校で開かれたアンティークのチャリティーバザーで、私がひとめ惚れして購入したものである。写真2（GC004）は元駐日サウジアラビア王国大使夫人から数年前に頂戴した衣装であり、どちらもジッダ地方のアンティーク品であるという説明を受けている。

さらに驚いたことに、写真2の女児用フスターンに使用されている当時流行った花柄の生地は、現在その復刻版が再び市場に出回っており、生地質や服のデザインを変えて様々なアイテムに使用されているという話を、ジッダの女子工業大学で聞いた。事実、この生地を使用して、この大学の女学生が室内用フスターンやパジャマを制作していた。



写真1



写真2

写真1 女性用フスターン（ワンピース型長衣）(GC046)

写真2 女児用フスターン（ワンピース型長衣）(GC004)

写真1は、1989年頃、筆者がアッリヤード（リヤド）市内の女子小学校にて、チャリティーバザーで購入。購入時にジェッダ方面のアンティークとの説明を受けたもの。写真2は、2015年に、元駐日サウジアラビア王国大使夫人より筆者に贈られたもの。ジェッダ方面のアンティークとの説明を受けた。今回の調査において、写真1、2と同等の衣装が1968～69年当時ワーディ・ファールティマで着用されていたことが判明した。



写真3

スークで販売されている複製版プリント生地
生地は、写真2と写真4の衣装に使用されているものと同じ柄である。

特に宗教行事、断食が行われるラマダーン月が近づくと、この複製版の柄が懐古趣味の高揚と共に人気が出てくるのだという。実際に、ジッダのオールドスーク（市場）でこの生地（写真3）や、この生地を使用した部屋着がたくさん売られているのを見つけた（写真4）。この人気は、たとえば言うならば昭和30年代～50年代の小花柄プリント生地で作ったワンピースなどが、原宿のビンテージショップで人気を呼んでいるのと似たような現象だろうか。現代のプリント技術からすれば、生機（きばた）のよれ、プリントの版ずれ、地色のむら染めが多く、お世辞でも決して良品質とはいえないようなお粗末なものなのだが、それが今、「素朴でかわいい」と若者から支持を受けているのだ。言ってみれば、懐古趣味、ビンテージ流行りは世界的潮流なのかもしれない。

現代の衣装との比較

最後に、現代における女性衣装との比較をしてみたい。ひと言で現代の衣装といっても、今や世界中から輸入されるジーンズからTシャツまで様々だが、今でも広く愛されている伝統的な貫頭型長衣を取り上げる。



写真4

市場で売られている、複製版プリント生地を用いた現代の部屋着
が、かつてのように何枚もの布をはぎ合わせ、腹側から背中側に生地を通して使用し、あとから顔の入る穴をあけるのではなく、腹側と背中側2枚の見頃を肩と脇で縫い合わせるだけに、縫製が簡略化されたのである。つまり、肩で縫い合わせるという西洋の洋服スタイルが持ち込まれ、大量生産されるようになったのだ。また、刺繍のほとんどは機械刺繍に取って代わられた。もちろん、1枚ずつサイズや好みに合わせて仕立てる注文服もまだまだ盛んであり、布地スーク（市場）には生地屋と部品屋、仕立屋が軒を連ねてはいるが。

ラーハの豊かさ

物質文化という面から鑑みると、移動が多いからこそ持ち物が少なく、衣装を丁寧に作り、大切に着回しリサイクルしていた遊牧民時代と、定住化が進みたくさんの衣装を持つようになったが大量生産品が多い現代とでは、いったいどちらが豊かと言えるのであろうか。

数は圧倒的に少なくとも、長い時間をかけ、気持ちを込めながら懇切丁寧な仕事を施した衣装には、「もの」としての価値のみならず精神性も加わり、今でもそれらの衣装は

私たちに「なにか」を訴えかけ、感動を誘うのである。ものをいとおしみ、大切に引き継いできた目に見えない「時間」・・・、それこそが、片倉もこのいう「ラーハ（ゆとろぎ）」なのではないだろうか。



写真5 半世紀前の既婚女性用貫頭型長衣



写真6 現代の貫頭型長衣

写真5 半世紀前の貫頭型長衣の製法の特徴

- 肩が輪になっていること
- 10パーツ19枚で構成されていること
- 手縫い、手刺繍であること

写真6 現代の貫頭型長衣の製法の特徴

- 肩で前見頃、後ろ見頃を縫い合わせする西洋式であること
- 3パーツ4枚で構成されていること
- ミシン縫い、機械刺繍で大量生産されること

サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年 —「みられる私」より「みる私」—

横浜ユーラシア文化館 2019年10月5日(土)～12月22日(日)

横浜ユーラシア文化館にて、1960年代末に片倉もとこが実施した調査の追跡調査結果を交えながら、当時片倉が撮影した貴重な写真、色鮮やかなマスクや衣装、生活道具を通して、サウジアラビア女性の生活世界の変遷をたどります。(本企画展はp16で紹介した国立民族学博物館にて開催の企画展の巡回展となります。)

【ところ】〒231-0021横浜市中区日本大通12 / TEL:045-663-2424 / FAX:045-663-2453 【観覧料】一般300円 / 小・中学生150円

【開館時間】9:30～17:00(券売は閉館30分前) 【休館日】毎週月曜日※月曜日が祝日の場合は翌日が休館日

【アクセス】みなとみらい線「日本大通り駅」3番出口すぐ / JR「関内駅」南口・市営地下鉄関内1番出口から徒歩約10分

●調査関係者による連続講座 有料

第1回 10月13日(日)「オアシスを生き抜く知恵」

講師：縄田浩志(秋田大学教授)、坂田隆(石巻専修大学教授)

第2回 10月27日(日)「女性の衣装と装身具の魅力」

講師：遠藤仁(人間文化研究機構研究員)、郡司みさお(片倉もとこ記念沙漠文化財団理事)

第3回 11月10日(日)「片倉もとことアラブ・イスラームの文化人類学」

講師：片倉邦雄(片倉もとこ記念沙漠文化財団評議員会議長)、西尾哲夫(国立民族学博物館教授)

第4回 11月24日(日)「女性の生活空間とてなし」

講師：西本真一(日本工業大学教授)、竹田多麻子(当館学芸員)

第5回 12月8日(日)「写真と画像から読み解く景観と暮らしの変化」

講師：藤本悠子(片倉もとこ記念沙漠文化財団主事)、渡辺三津子(片倉もとこ記念沙漠文化財団理事)

会場：1階ギャラリー / 時間：14時～(各回1時間程度) / 参加費：各回500円 / 定員：40名(申し込み不要・当日先着順)

●ギャラリートーク

日時：10月25日(金)17時30分～担当学芸員 / 11月3日(日)15時30分～縄田浩志 / 12月13日(金)15時～担当学芸員

*各回30分程度 / 企画展観覧券が必要です

●ワークショップ

◎講演・試着体験「移りゆくアラビア衣装」 有料・事前申込

サウジアラビア衣装の詳しい解説と衣装試着体験。衣装を着て展示室に行ってみよう。

日時：10月6日(日)13時～、15時～(*各回1時間程度) / 会場：情文プラザ(横浜情報文化センター1階)

講師：郡司みさお ほか / 定員：20名 / 参加費：300円 / 申込方法：メール

◎ペーパークラフト「民族衣装マハーリードを和紙で作ろう！」 有料・事前申込

一枚布でできるマハーリード(女性の外着)のミニチュアを和紙で作ってみよう。

日時：11月3日(日)10時30分～、11月4日(月)14:00～、12月7日(土)10時30分～、13時～*各回1時間程度

会場：当館1階ギャラリー / 講師：郡司みさお ほか / 定員：各回10名 / 参加費：500円 / 申込方法：メール

◎Week-end ワークショップ 無料

サウジアラビアの衣装を着てみよう!ブルグア(マスク)のぬり絵。

日時：会期中の土、日、祝日 午前9時30分～午後4時30分(受付は午後4時まで) / 会場：1階図書コーナー / 参加費：無料

*諸事情により実施しない場合もあります。

●関連展示

◎パネル展示「イスラーム&サウジアラビア&横浜を知ろう！」 入場無料

会場：1階ギャラリー / ギャラリートーク：11月9日(土)14時～ アナス・ムハンマド・メレー(ムスリム世界連盟日本支部代表)
協力：Muslim World League

◎特別展示「江上コレクションの西アジア服飾品」

会場：2階常設展示室一部

内容や申込方法の詳細は
横浜ユーラシア文化館Webサイト
をご覧ください。
<http://www.eurashia.city.yokohama.jp/exhibition/index.html>
事前申込のワークショップの申込開始は9月26日(木)から受け付け、
定員になり次第、締め切ります。

●イベント「遊牧民のテントでアラビア文化を体験！」 無料

協力：イマーム・ムハンマド・イブン・サウド・イスラーム大学分校 アラブイスラーム学院

横浜ユーラシア文化館のお隣にアラブのテントが登場。アラビックコーヒーの試飲、香り体験など様々なイベントを行います。

日時：10月29日(火)～11月4日(月)10時30分～17時 *11月3日のみ19時まで

会場：情文プラザ（横浜情報文化センター1階）

◎アラビアコーヒーと試飲と香り体験 日時：11月2日(土)～4日(月) イベント開催中

◎サウジアラビア女性の夜会を体験しよう！ 事前申込 日時：11月2日(土) 4回実施、各回30分程度

1960年代に片倉もとこが見たアラブ女性たちの夜会の一部を再現。きらびやかな衣装を着て、夜会を体験してみよう。

定員：1回につき5名 *衣装は女性用です。／ 申込方法：メール

企画：秋田大学国際資源学部サウジFWグループ

◎コーヒー体験講座「サウジアラビアのコーヒー文化」 事前申込 日時：11月3日(日)13時30分～*約1時間30分程度

コーヒーの試飲と、サウジアラビアの暮らしにかかせないコーヒーの歴史や文化を解説します。

講師：縄田浩志 / 定員：30名 / 申込方法：メール

●外部関連イベント「ごはんで世界一周～サウジアラビア編」 事前申込 *問い合わせ・申し込み先：

野毛地区センター tel 045-241-4535

食を通してサウジアラビアの文化を紹介します。デーツ（ナツメヤシの果実）を使ったケーキを作り、アラビックコーヒーとともに試食します。

講師：アナス・ムハンマド・メレー（ムスリム世界連盟日本支部代表）、石山俊（オアシス研究家）

日時：10月19日(土)10時30分～13時

会場：横浜市野毛地区センター 料理室 / 定員：16名 / 参加費：1,000円（企画展招待券付） / 申込方法：往復ハガキ

主催：横浜市野毛地区センター、協力：横浜ユーラシア文化館

📁活動報告

■ 2017年12月16日 横浜情報文化センター 情文ホール（横浜市）において、国際シンポジウム「アラビア半島の文化遺産保護の現状と展開サウジアラビアを中心として」を開催しました。（共催：人間文化研究機構「現代中東地域研究事業」秋田大学拠点、片倉もとこ記念沙漠文化財団ほか）

■ 2018年3月15日 大東文化会館（東京都板橋区）において開催された研究会「若手研究者による沙漠文化研究の新たな地平」において、2016年、2017年の若手研究助成の被助成者による研究発表が行われました。（主催：片倉もとこ記念沙漠文化財団、日本沙漠学会沙漠誌分科会）

■ 2018年4月28日～5月18日 サウジアラビア王国マッカ州にて、片倉もとこによる半世紀前の調査のフォローアップ調査を実施いたしました。詳細は本ニューズレター内で報告しています。

■ 2018年5月26日 2016年の若手研究助成を受けて実施された廣田千恵子氏（千葉大学・大学院生）による研究発表が、日本沙漠学会第29回学術大会においてベストポスター賞を受賞しました。

■ 2018年5月26日～27日 2018年3月期の一般活動助成を受け、「日本沙漠学会第29回学術大会における沙漠イメージ作品の展示」（代表者：上江 洲里美氏、秋田公立美術大学・学生）が行われました。

■ 2018年7月26日 2018年6月期の一般活動助成を受け、「東京アラビアンナイト」（実行委員長：玉澤恵理氏、早稲田大学・学生）が行われました。

■ 2018年10月25日（於・栃木県立栃木女子高等学校）、2018年11月9日（於・神奈川県神奈川学園中学校）に、出張授業を実施しました。

■ 2018年12月22日～2019年1月12日 サウジアラビア王国マッカ州にて、第2回フォローアップ調査を実施いたしました。詳細は次号以降で報告予定です。

📁編集後記

数年越しの準備期間を経て、2018年5月と12月に、片倉もとこの調査地であったサウジアラビア王国マッカ州にあるワーディ・ファータマを訪問することができました。調査の様子は今号と次号においてご報告する予定です。なかなか目にする機会のないサウジアラビアの風景について、多くの美しい写真とともにお届けできればと思っています。（渡邊）

📁片倉もとこ記念沙漠文化財団事務局

〒151-0063 東京都渋谷区富ヶ谷 2-21-1-610 号室

TEL：03-6407-9873 FAX：03-6407-9090

Mail：office@moko-f.com Web：http://moko-f.com

片倉もとこ記念沙漠文化財団ニューズレター No. 6

Motoko Katakura Foundation for Desert Culture

News Letter

2019年9月5日発行

編集：情報発信委員会（渡邊三津子、古澤文、藤本悠子）

発行：片倉もとこ記念沙漠文化財団